

生徒が援助要請を出しやすい環境づくり
— 学校不適應からの回復力を促す支援の実際 —
教育相談課 長期研修員 岩田 明可

1 主題設定の理由

文部科学省の「令和元年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果」によると、全国の高等学校の不登校生徒は50,100人であり、指導の結果、登校できるようになったのはその中の39.4%である。高等学校では単位修得の問題などもあり、長期間不登校になってしまうと同じ学校に復帰するのは困難である。これらのことから不登校の未然防止が重要であると考ええる。

先行研究である「全ての生徒が安心して生活できる学校づくりを目指して一生徒の思いに寄り添う教育相談を通した信頼関係づくりー」（小澤，2020）では、不登校未然防止の観点から、学校全体で体制を整え教育相談を行うことで、生徒と教員の信頼関係が深まり、安心して生活できる学校に近づくことが検証、報告されている。

研究協力校では生徒が安心して生活できるような取組を行い、教育相談体制は整えられていると言える。例えば、未然防止の取組としていじめを見逃さないためのいじめ防止対策委員会の設置や週に1度の相談室会議を行っている。また、「hyper-QU」（図1）、「スタディーサポート」（図2）、「気になる生徒のチェック表」（図3）、「安心安全な学校づくりアンケート」などのツールを使用している。しかし、毎年数名の生徒が学校生活に不適應を起こし、不登校に至っていることから、学校不適應の予防と不適應からの回復を促すことが必要であると考えた。そこで、学校での取組をより効果的に活用するために、生徒の状態に合わせた取組にしたい。

筆者自身、自分から相談に来ることができない不適應を抱えた生徒への対応は難しいと感じてきた。そのような生徒の中でも面談等で何に困っているかを自分で伝えられた生徒は回復することが多かった。「困っていると言える」、「人に相談できる」ということ、つまり、援助要請を出すことが回復するための一つの要素であると考えられる。

心の回復力はレジリエンスとも言われ、今年度、教育相談課の研究でも取り組んでいる。いくつかあるレジリエンスモデルの中で、日本の社会、文化、学校教育で大事にされてきた要素「心」「技」「体」に分け考案されたのが「富士山モデル」（小林，2019）である。ここでは援助要請を出すことを「技」に分類している。課研究と連動しながら高校生年齢の研究を行いたい。研究に当たっては二つの側面から支援の方法を探る。

一つ目は、学級や学年など集団に対する取組である。集団の特徴に合わせた人間関係づくりプログラム等の活動を提案し、集団内の人間関係を円滑にすることで、生徒が援助要請を出しやすい環境をつくりたい。

二つ目は、援助要請が出せない生徒への個別対応である。教員が注意深く観察することで対応できる場合もあるが、見過ごされてしまうこともある。そのようにならないために、生徒の様子を知るためのツールが活用できるのではないかと考えた。

研究協力校では毎年1年生を対象に hyper-QU を実施している。個人の学級満足度やソーシャルスキル、学級の状態を知ることができるが、結果を受けた後、どのような指導につながれば良いか悩んでいる担任もいる。結果を確認した後の開発的な支援の在り方を示すことで、援助要請が出せない生徒への対応の一例を提案することができると考える。また、生徒の個別対応は担任によるところが大きく、個々にとどまっている生徒理解のための取組や対応の工夫を教員間で共有できるようにしたい。

以上のことから、学校不適応の予防、学校不適応からの素早い回復や適応に向けての手立て、支援の在り方などを研究すべく本主題を設定した。

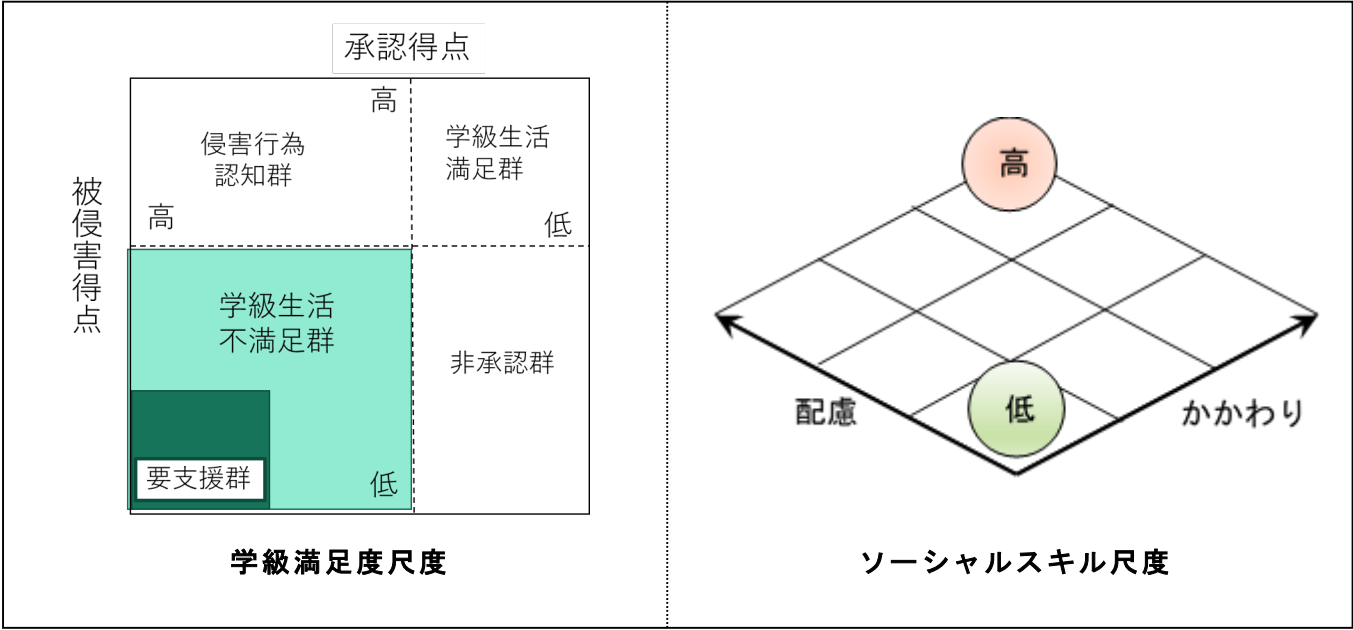


図1 hyper-QU の尺度

学力	国語 B2	数学 C2	英語 C3	今回の総合のG T Z (学力) はC1でした。この成績は、4年制大挑戦レベルの到達度となっています。数学・英語ともまず復習が必要です。
学習	国語 B2	数学 B2	英語 C1	今回の総合のG T Z (学習習慣) はB3でした。この成績は、標準レベルの到達度となっています。英語の学習習慣が身につけていないようです。
悩み 気持ち	注目点 学習法悩み	学校生活振り返り 6点		高校生活には満足しているようですが、学習方法がわからず悩んでいるようです。面談などを通して現在の悩みを確認し悩みを解消するための具体的なアドバイスを行う必要があります。
生活	部活動と学習の両立 ▲	就寝時間 1時		就寝時間が25時以降で注意が必要です。面談などを通して、現在の生活習慣を確認する必要があります。また、部活動のために学習時間が確保できていないようです。

図2 スタディーサポートの個人診断表

HRNO	氏名	チェック内容
		提出物の期限が守れない
		相手の意図を読み取れない
		一方通行の会話
		提出物の期限が守れない
		友人より教師と関わる
		自分中心になりたい

図3 気になる生徒のチェック表のまとめ

2 研究の目的

援助要請を出すことが回復するための一つの要素であると考えられることから、学校不適応からの回復力を促すために、生徒が援助要請を出しやすい環境をつくりたい。特別な新しいことを始めるのではなく、既に使用しているツールの活用方法や、学校要因で不適応を起し回復した事例を研究する。集団と個の二つの側面から、多忙な学校現場で無理

なく始めることができる、生徒への働きかけの具体を提案する。

3 研究の方法

県内の高等学校1校（普通科、芸術科）を研究協力校とし、1年生203人を対象に次の方法で行った。

- (1) 1年生、全教員を対象に事前調査を実施し、学校生活に関する実態を把握する。
- (2) 生徒が援助要請を出しやすい環境づくりをするために、集団と個という二つの側面から次の取組を考え、実践を促す。

ア 1年部教員を対象に、hyper-QU等のツール活用研修会の実施

イ クラス担任による、集団の特徴に合わせた人間関係づくりプログラム等の実施

ウ クラス担任による、気になる生徒への個別対応の実施

- (3) 1年生を対象に事後調査を実施する。その後、事前調査結果との比較や教員への聞き取りを基に実践効果を検証し、効果が期待される取組を提案する。

4 研究の内容

(1) 学校生活に関する事前調査の実施（6月上旬）

ア 教員のツール活用の実態

研究協力校の全教員を対象にアンケート調査を行い、28人から回答を得た。学校不適応が改善した事例の有無と、活用しているツールについて質問した。複数回答可の質問「生徒が援助要請を出しやすいようにするために活用しているツール」については、毎日記入する学習時間調査の一言欄や健康観察を活用している教員が多く、hyper-QUはあまり活用

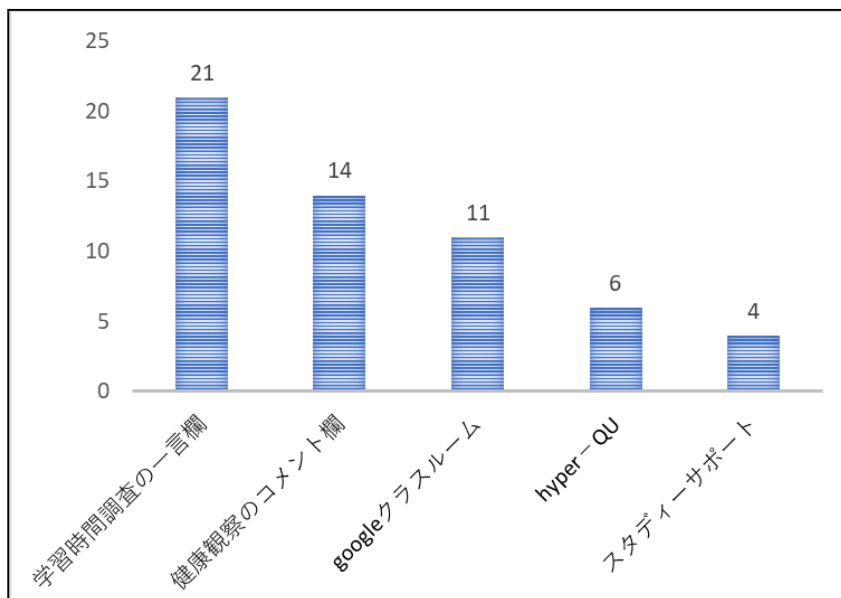


図4 活用しているツール

されていないことが分かった（図4）。これは主題設定の理由にも記載したように予想どおりであった。

学校不適応から改善した事例の有無については4(1)ウの聞き取り調査で利用した。

イ 生徒の校内における人間関係に関する実態

研究協力校1年生203人を対象に学校生活についてのアンケート調査を6件法で実施した。1・2・3を選択した生徒を否定群、4・5・6を選択した生徒を肯定群とした（表1）。どの質問も否定群より肯定群の割合が高く、学年全体が落ち着いた状態であり、多くの生徒が充実した学校生活を送っていることが分かる。高等学校では生徒の自立を促すよう教員が生徒と適切な距離を保ち面談等を行っているが、生徒の受

け止め方と差があり、他の質問に比べ質問⑥の肯定群の割合が低かったのではないかと考えられる。

表 1 生徒アンケート（全体）

N=203

質問	否定群		肯定群	
① 学校に悩みを話せる友人がいる。	33人	16.3%	170人	83.7%
② 困ったときは手伝ってもらえるよう校内の友人にお願いできる。	15人	7.4%	188人	92.6%
③ 学校で自分の良さを発揮できる場面がある。	41人	20.2%	162人	79.8%
④ クラスで自分の意見を言うことができる。	58人	28.6%	145人	71.4%
⑤ 学校には話をしやすい先生がいる。	50人	24.6%	153人	75.4%
⑥ 学校には悩みを相談できる先生がいる。	85人	41.9%	118人	58.1%
⑦ 学校には自分の良さや頑張りを認めてくれる先生がいる。	46人	22.7%	157人	77.3%

次に、hyper-QU の学級満足度尺度の分類で、学級生活不満足群とそれ以外の集団に分けて比較した（図 5、図 6）。学級生活不満足群は学校不適応の心配があるとされる集団であり、それ以外は学校不適応の心配が少ないとされる集団である。学級生活不満足群の生徒はそれ以外の生徒に比べ、全ての質問で肯定群の割合が低い。特に質問①、③、④は二つの集団の差が大きい。また、質問④、⑥は肯定群が 50%を下回っており、低い割合になっている。この結果から、学級生活不満足群の中には、友人や教員との関わり方や自己表現の方法を身に付けられずに過ごしてきた生徒が多くいることが分かる。そのため、集団の特徴に合わせた活動によってこれらのスキルを高めることができるのではないかと期待される。群による違いに注目し、事後調査との比較も行う。

N=47

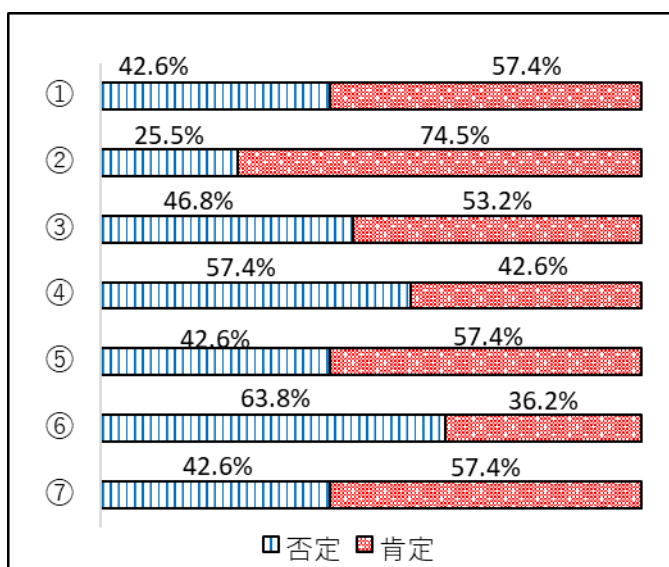


図 5 生徒アンケート
（学級生活不満足群）

N=156

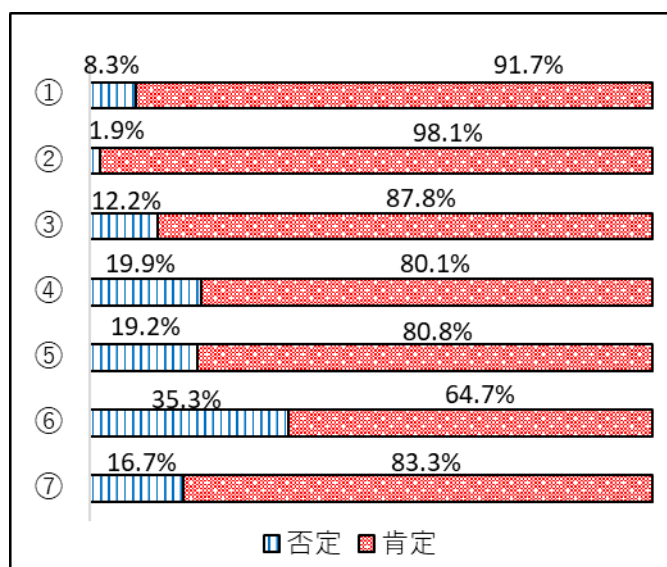


図 6 生徒アンケート
（学級生活不満足群以外）

ウ 事例の聞き取り調査（５月下旬、６月）

学校要因で不適応を起こし、その後回復した生徒の事例の聞き取り調査を実施した。その際、２・３年生 451 人が１年生のときに実施した hyper-QU と気になる生徒のチェック表を利用した。気になる生徒のチェック表にチェックが入っていない生徒は一見おとなしくしっかりしているように見え、見過ごされてしまうことがある。そのため hyper-QU における要支援群の生徒の中で、気になる生徒のチェック表と重複がない生徒を中心に教員に聞き取りを行った。

また、今回は回復した事例の中でも原因が学校要因であるものに限定したため、要支援群以外や他学年にも範囲を広げて聞き取りをした。全部で 9 件の事例を集めることができた。その事例を不登校が起きる三つの条件（小林、大熊，2009）に照らし合わせて分析した。不登校が起きる三つの条件とは、次のとおりである。条件 1 「学校で嫌なことがある場合」、条件 2 「学校での嫌なことを乗り越え（られず）、しのげない場合」、条件 3 「教師や仲間や保護者が子供を支える力が足りない場合」。それぞれの要因に対応できれば、不登校に至らずに回復が期待できると考えた。事例 9 件の中で回復の様子が分かりやすい 4 件を表にまとめ（表 2）、(ア) から (エ) の事例として示した。

表 2 の条件 2 「乗り越える力」は、事例の文章中の対応する部分に下線で示した。生徒 C、生徒 D は乗り越える力が全くないということではなく、聞き取りの中に自ら行動したことがなかったということである。条件 3 の「周囲が支える力」についても、常に関わっているクラス担任以外で、調査の中で聞き取ることができた人物に印をつけたため、実際は更に多くの人に支えられている。学校生活の中で嫌なことが全く起こらない生徒はいないため、乗り越える力が弱い生徒はこの時点で不登校が起きる三つの条件のうち二つを満たしてしまう。しかし、三つ目の条件である「周囲が支える力」があれば回復できる可能性は大いにある。これらを研究協力校の教員と共有し類似した生徒がいる場合には対応の参考になるようにした。

表 2 回復した生徒の主な要因

生徒	条件 1	条件 2	条件 3				
	学校での嫌な事	乗り越える力	周囲が支える力（担任以外）				
			部活動顧問	養護教諭	S C	友人	家族
A	hyper-QU の要支援群	○	—	—	—	○	—
B	高 1 クライシス	○	—	○	—	—	—
C	部活動の人間関係	—	○	—	○	—	○
D	弱音を吐くことができない	—	—	—	○	—	—

(7) 生徒 A：日常的な観察や声掛けにより回復した事例

特別進学クラスに所属しているが、級友と比べるとテスト等の点数があまり高くなかったため承認得点が低く出たと思われる。すぐに結果が出なくても前向きな態度

で努力を続けた。クラス内に友人ができ、一緒に過ごしていた。欠席はほとんどなく学校不適應の状態ではない。1年生のときの担任への聞き取りでは、特別なことはしなかったという回答であった。しかし、この生徒が要支援群であったことを記憶しており普段から気に掛けていたことが分かる。

(イ) 生徒B：心の居場所が確保され回復した事例

小規模の小・中学校で過ごしてきたため、高校の人数の多さに慣れることができなかった。不登校ではないが1年生の1学期は保健室に行くことや欠席することが多かった。担任が二者面談の予定を組むときに最後の枠にして長めに時間を取り、本人の話をじっくり聞いた。本人が好きなものや世界観について否定せずに聞くようにした。そのうち、面接以外の時にも自分から担任に話をしに来るようになった。心の居場所が確保され、欠席しなくなった。

(ウ) 生徒C：不安の原因を取り除くことで回復した事例

微熱での欠席が続き、病院にも行ったが身体的に異常はなかった。医師から、何かストレスになっていることはないかと聞かれ、保護者が本人と話をしたところ部活動で気になっていることがあると分かった。スクールカウンセラーとの面談で、ある先輩が自分にだけ厳しい態度で接するようになった気がすると話すことができた。本人からの要望で、部活動顧問からその先輩に確認してもらったところ、本人の思い過ごしであることが分かった。自分の気持ちを伝えるまでに時間はかかったが、周囲の協力により不安の原因が取り除かれ登校できるようになった。

(エ) 生徒D：意識の変化を促すことで回復した事例

中学校までは成績優秀であった生徒である。保護者は、中学時代が本来の姿であると思っている。高校では、テストで平均点にも到達しなくなってしまった。自分より成績が良い人がいることを頭では理解しているが現状を受け入れることができない。不登校ではないが欠席が増えてしまった。スクールカウンセラーとの面談で、常に頑張り続けてきた人は弱音を吐くことが苦手であり、本人もそうであることが分かった。スクールカウンセラーがロールモデルとなった。また、校内順位だけを気にするのではなく、将来どうなりたいかを考え、そのための力を付ければ良いということを確認した。数か月に1回のカウンセリングを続け、意識が変化し欠席しなくなった。

(2) 研究協力校での実践

ア hyper-QU のツール活用研修会の実施（6月下旬）

研究協力校1年部の教員11人を対象にhyper-QU等のツール活用研修会を実施した。hyper-QUの結果から得られたクラスの特徴を基に、具体的な指導や活動を提案した。

一般的にhyper-QUの学級満足度の分布は6パターンに（図7）、ソーシャルスキルの分布は4パターンに（図8）分類されている。研究協力校の過去2年分12クラスのデータは学級満足度が3パターン、ソーシャルスキルが2パターンに絞られた（表3、

表 4)。なお学級満足度の分布を㊦（図 7）、ソーシャルスキルの分布を㊦（図 8）とし、表 3、表 4、表 6 の項目と対応している。

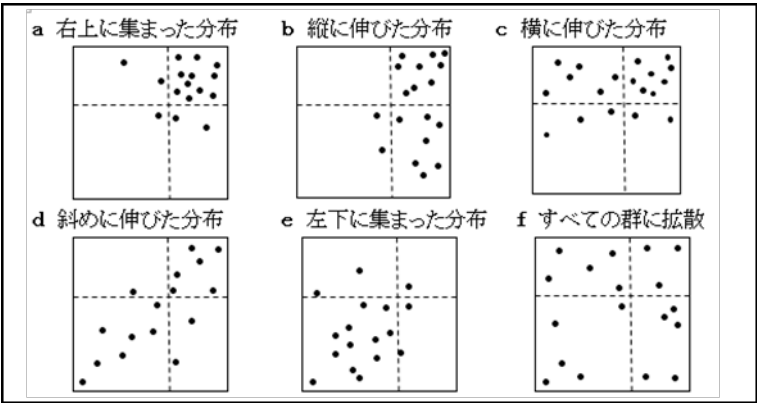


図 7 ㊦学級満足度の分布

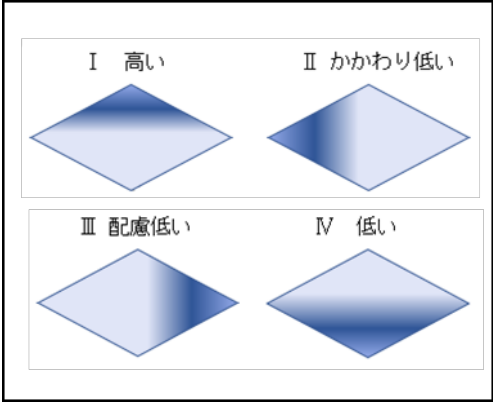


図 8 ㊦ソーシャルスキルの分布

hyper-QU の結果のまとめ用紙からキーワードを抜き出し、それに合う人間関係づくりプログラムを選んだ。活用しやすいよう「おすすめの人間関係づくりプログラム」のフローチャートを作成し提案した（図 9）。図の中の番号とアルファベットは人間関係づくりプログラムのテーマ（表 5）と一致している。

表 3 令和 2 年度結果

	㊦	㊦
11	a	I
12	d	II
13	a	I
14	d	II
15	b	II
16	d	II

表 4 令和元年度結果

	㊦	㊦
11	a	I
12	a	I
13	d	II
14	b	II
15	b	I
16	a	II

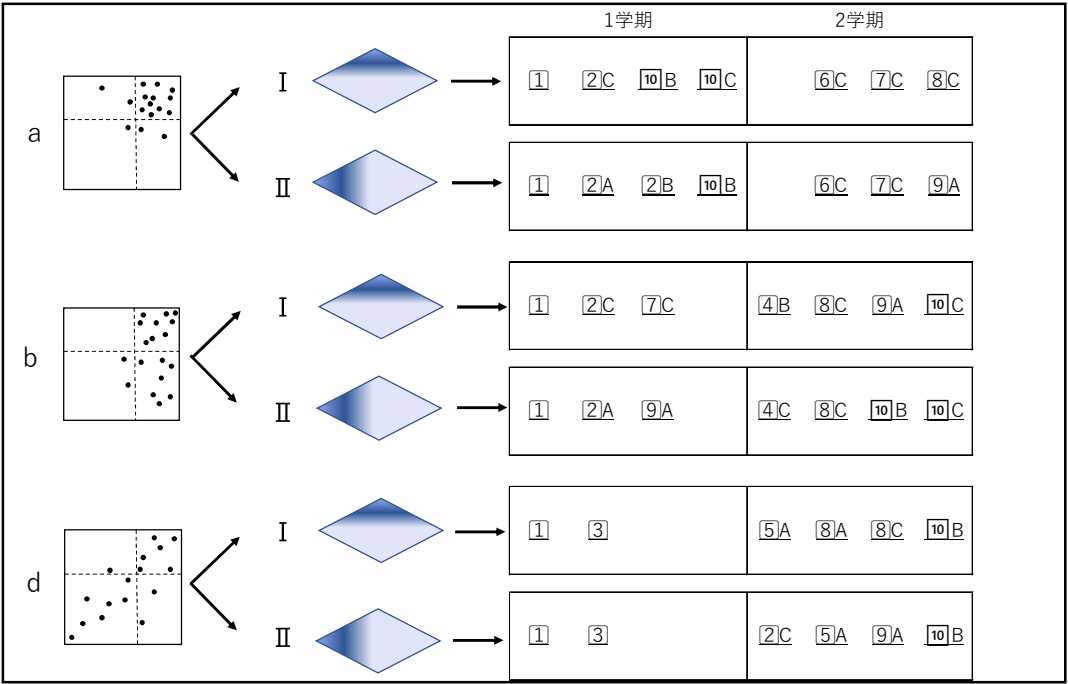


図 9 おすすめの人間関係づくりプログラム

表 5 人間関係づくりプログラムのテーマ

No	編 テーマ	A	B	C
		基本編	標準編	発展編
①	クラス作りのための人間関係づくり	積み木自己紹介	① 互いのことを知り合おう ② 互いの理解を深めよう	互いに親しくなろう
②	行事における人間関係づくり	みんなの気持ちをひとつにしよう	文化祭模擬店 ロールプレイ	問題解決の方法を身につけよう
③	規範意識と人間関係づくり	不思議の国の鬼ごっこ	電車迷惑ワースト8	1番してはいけないのは？
④	いじめ・自殺防止対策としての人間関係づくり	ヒューマンビンゴ	短所を長所に	感じてみよう 「その時の気持ち」
⑤	部活動における人間関係づくり	心と体を合わせてチーム力をアップさせよう		対立を建設的な方向に解消しよう
⑥	ストレス対処と人間関係づくり	セルフケア		プラスのストロークを贈ろう
⑦	キャリア教育／学力向上のための人間関係づくり	学習ビンゴ	カードを使った進路探索	進路選択、何が大事？
⑧	目的達成(自己実現)のための人間関係づくり	ボールを使って課題にチャレンジ	人生の分かれ目に決断	みんなで解決策を考えよう
⑨	支え合うための人間関係づくり	役割分担でシートを華麗に動かそう	信頼できる仲間の中で、自分を表現してみよう	ストーリーテリング
⑩	特別支援における人間関係づくり	トラストウォーク	頼んでみよう、断ってみよう	何げない一言でだれかを傷つけていませんか

静岡県教育委員会「人間関係づくりプログラム」

イ クラスの特徴に合わせた人間関係づくりプログラム等の実施（6月～）

今年度の1年生はhyper-QUのクラスごとの結果に大きな差がなく、似た傾向にあることが分かった（表6）。

学級満足度の分布のdは学級内でのルールへの定着が低く、人間関係も希薄な状態と考えられる。bは一見静かで落ち着いた学級に見えるが、意欲に差がみられ、人間関係が希薄な状態と考えられる。ソーシャルスキルの分布のⅡは周りから排斥されることは少ないが、人と関わるのが苦手な生徒が多い傾向がある。これらの特徴をまとめると、人との関わりが仲の良い友人間で閉じてしまっていることが危惧される集団である。このことを研修会で1年部の教員に伝えたところ、学年全体で関わりのスキルを高める活動を取り入れることになった。

学年での取組として、総合的な探究の時間に行っているプロジェクトで活動をするグループの人数を6人から4人に変更し、一人一人が意見を言いやすい人数にした。また、人間関係づくりプログラムの中にもあるブレインストーミングやKJ法などを取り入れ、生徒の問題解決能力を高められるようにした。

クラスでの取組として、HR活動の時間に「おすすめの人間関係づくりプログラム」を参考に人間関係づくりプログラムを行った。学期の初めに「クラス作りのための人間関係づくり」、学校祭等の行事の前に「行事における人間関係づくり」、レクレーションを通して「支え合うための人間関係づくり」を実施した。その他にも、各担任の発案でサイコロトーク、哲学おしゃべりカード、人狼ゲームのようなクイズやゲームを行いクラス内の人間関係を円滑にできるようにした。最初に集団の特徴を示した

表 6 令和3年度結果

	㊦	㊧
11	d	Ⅱ
12	d	Ⅱ
13	b	Ⅱ
14	d	Ⅱ
15	d	Ⅱ

ことで、どのような活動をすれば良いか各担任が考え実践したことが良かった。

ウ 気になる生徒の個別対応（7月～）

2・3年生の結果と同様に1年生も hyper-QU の要支援群の生徒に注目した。気になる生徒のチェック表との重複はなく、見逃されてしまうことが危惧される8人の生徒である。面談の準備として hyper-QU とスタディーサポートから、悩みの項目と注意する項目を抜き出しておくことを提案した。また、委員会や部活動などでどのように活躍しているか情報収集をし、頑張りを認めていくことも提案した。これらを基に三者面談、二者面談、日常的な声掛けの実践を促した。

個別対応について研究協力校の教員の意見も取り入れた。「面談というと身構えてしまうため掃除の時間に声掛けをしている。」、「下校時になかなか帰ろうとしない生徒は話したいことがある場合が多いため、努めて教員から話し掛けるようにしている。」というように経験の豊富な教員はあらゆる場面での教育相談を実践している。

4 (1)ウの生徒Aの事例のように、ツールの活用とともに日常的に生徒を観察する教員の目も非常に重要であるため、学年会の中で意見交換し、経験の浅い教員も取り組みやすいようにした。

(3) 事後調査の実施（10月）

研究協力校1年生203人を対象にアンケート調査を行った。なお、事前アンケートと同じ質問、同じ方法で行った。

ア 校内の人間関係に関する質問における生徒の変化

集団に対する実践の効果を確認するため二つの質問「②困ったときは手伝ってもらえるよう校内の友人にお願いできる。」、「④クラスで自分の意見を言うことができる。」に注目した。事前アンケートで比較した hyper-QU の学級生活不満足群と学級生活不満足群以外の集団に分けて分析した。以下、学級生活不満足群を集団α、学級生活不満足群以外を集団βとする。

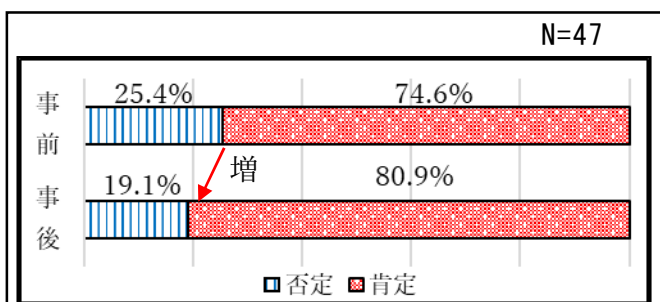


図 10 集団α 質問②

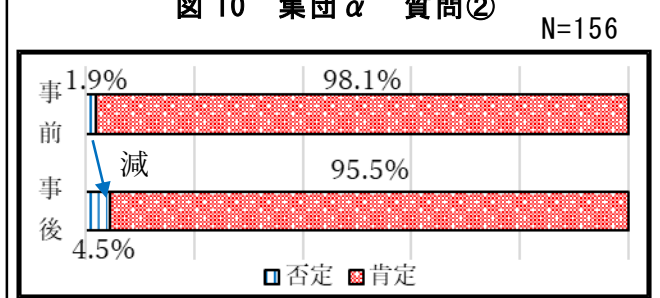


図 11 集団β 質問②

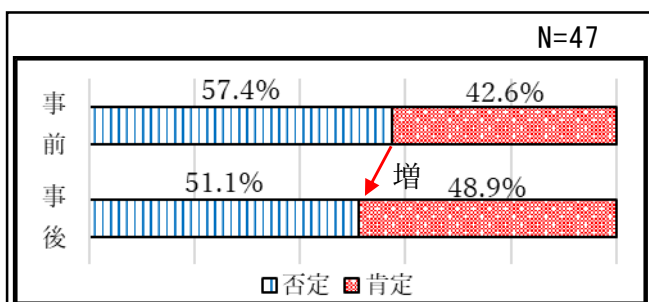


図 12 集団α 質問④

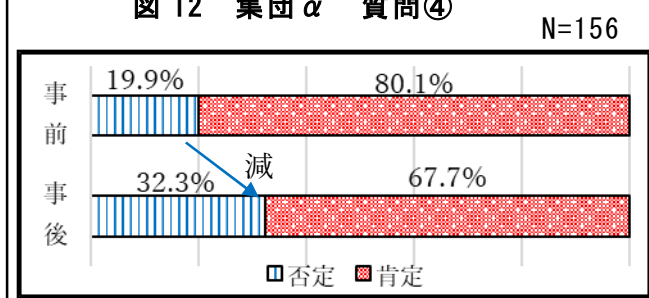


図 13 集団β 質問④

どちらの質問も集団 β の方が事前事後共に肯定群の割合が高いが、事前事後の変化に着目すると集団 α は肯定群が増加していることが分かった。質問②は集団 α の肯定群が 6.3 ポイント増加し（図 10）、集団 β の肯定群は 2.6 ポイント減少している（図 11）。質問④は集団 α の肯定群が 6.3 ポイント増加し（図 12）、集団 β の肯定群は 12.4 ポイント減少している（図 13）。

集団 β の肯定群の減少については様々な要因が考えられる。その一つにアンケートの実施時期がある。事前アンケートは 6 月に実施し、文化祭、体育祭、合唱コンクールなどが行われた直後であった。事後アンケートは 10 月に実施し、9 月末まで緊急事態宣言が発令されており行事や部活動などが制限されていた。そのため 2 学期は生徒同士が関わる機会が少なかった。

このような状況の中で、集団 α の肯定群が増加しているということは、実践の効果があったと考えられる。

イ 援助要請のしやすさについて

(7) 質問間の相関関係

質問②、④と質問「①学校に悩みを話せる友人がいる。」について 1 年生 203 人の事後アンケートのデータでそれぞれ相関関係を調べた。②と①、④と①の関係を散布図で示した（図 14、図 15）。②と①の相関係数は 0.74 であり、強い正の相関がある。④と①の相関係数は 0.45 であり、強いとは言えないが正の相関がある。この結果から、周囲と関わりがもてる人ほど友人に悩みを話すことができる傾向にあると捉えた。

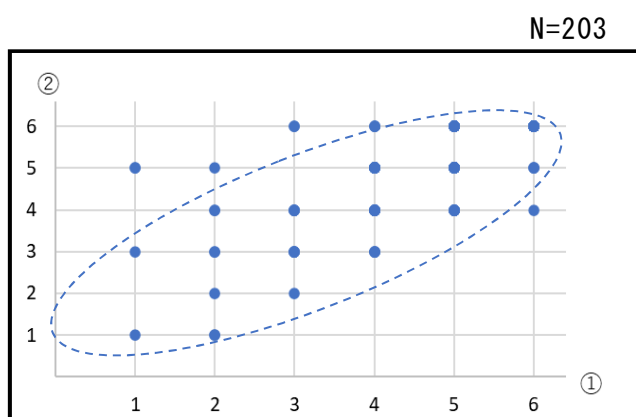


図 14 ②①散布図

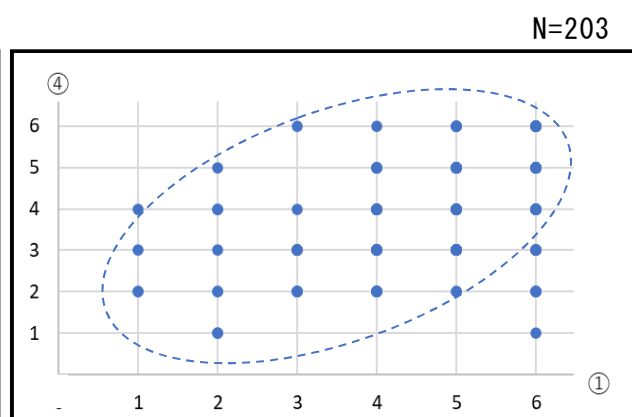


図 15 ④①散布図

(イ) 質問①の各集団における実践前後の差

質問①の事前アンケートと事後アンケートの数値の差に着目した。集団 α 、集団 β それぞれで事前と事後の数値の差を計算し、プラス、ゼロ、マイナスの 3 種類に分けて集計した（表 7）。差がプラスであれば「①学校に悩みを話せる友人がいる。」の数値が増加しているということである。その結果を符号検定を用いてプラスの数

とマイナスの数に有意差があるか分析した。

集団 α は $p=0.038$ 、集団 β は $p=0.18$ であった。

5%の水準で集団 α のみ有意差があると言える。
つまり、集団 α は事前アンケート時より事後アンケート時の方が「校内に悩みを話せる友人がいる」人が増えたということである。

表 7 事前事後の差

	+	0	-	計
α	18	21	8	47
β	41	83	32	156

(ア)、(イ)より、周囲との関わりが持てるようになると友人に対して援助要請が出しやすくなり、その傾向は集団 α に強く見られる。集団 α は hyper-QU の学級生活不満足群の生徒であり、他の生徒に比べて実践の効果があったと言える。集団 β の生徒については事前調査の時点から数値が高く、研究を開始する前から学校生活等で周囲との関わり方を学び、人間関係を構築してきたと考えられ、実践による大きな変化は見られなかった。

ウ hyper-QU の要支援群の生徒について

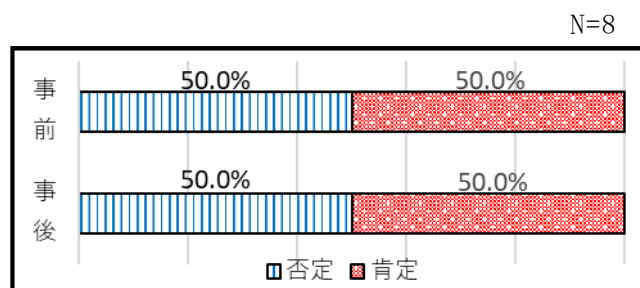


図 16 要支援群 質問②

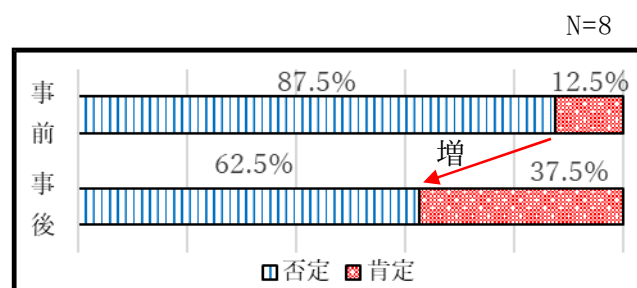


図 17 要支援群 質問④

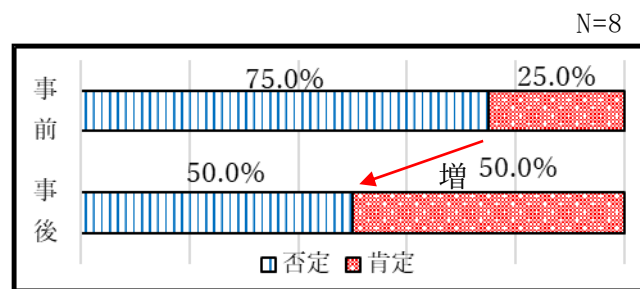


図 18 要支援群 質問①

個別の支援が必要とされる hyper-QU の要支援群の生徒にどのような変化があったか、4 (3)アと同様に二つの質問について着目した。「②困ったときは手伝ってもらえるよう校内の友人にお願いできる。」、「④クラスで自分の意見を言うことができる。」について事前事後の比較をした。②は変化がなく（図 16）、④は肯定群が 25 ポイント増加した（図 17）。そして「①学校に悩みを話せる友人がいる。」については 25 ポイント増加しており（図 18）友人に対する援助要請が出しやすくなっている。②は変化が見られなかったが、要支援群は学級生活不満足群に含まれており、結果は同じ傾向にあることが分かる。

さらに要支援群の生徒については、特に気を配って個別対応するよう研究協力校 1 年部の教員に提案した。その効果を計る視点として「⑥学校に悩みを相談できる先生がいる。」についても事前事後の比較をした。面談のみならず、あらゆる場面での教育相談を意識的に実践し、肯定群が 25 ポイント増加した（図 19）。教員に対しても援助要請が出しやすくなっていると言える。

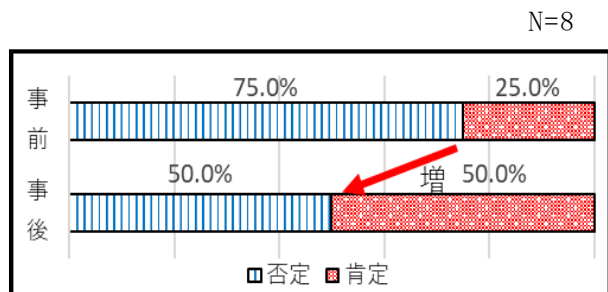


図 19 要支援群 質問⑥

要支援群は集団の人数が 8 人であり、他の集団と比べ人数が少なく、数値的に有意差があるかを示すのは難しい。しかし、学年主任への聞き取りを行った 10 月の時点で、研究協力校 1 年生に不登校傾向の生徒はみられず、実践の効果があったのではないかと考えられる。

5 研究のまとめ

(1) 研究の成果

hyper-QU の結果を生かし、具体的にどのような指導や取組をしたら良いかが明確になり、生徒が援助要請を出しやすい環境づくりの一例を示すことができた。

ア 集団の特徴に合わせた人間関係づくりプログラム等の活動を意図的・計画的に行うことで生徒が周囲と関わりを持てるようになり、友人への援助要請が出しやすくなることが分かった。特に hyper-QU の学級生活不満足群の生徒は、他の生徒と比べて高い効果が見られた。

イ 個別の支援が必要とされる hyper-QU の要支援群に属する生徒は、日常的な観察や声掛け等、丁寧に個別対応をすることで信頼関係を築き、教員に対する援助要請も出しやすくなることが分かった。

ウ 聞き取り調査から、特別に新しいことを始めなくても、生徒の思いを大事にした接し方を心掛けることで、生徒の気持ちや行動の変化を促すことができると分かった。

(2) 今後の研究課題

ア 本研究では、生徒が援助要請を出しやすくするためにツールを活用する方法を提案した。しかし、生徒の状況や学級の状況は日々変化しているため、生徒を観察する教員の目も非常に大切である。常に教員が教育相談的な視点を持ち生徒と接することができるよう、校内外の各種研修の機会を有効に活用する。

イ 研究実践より、心の回復力を促すにはバランス良く様々な活動に取り組むことが大切であると分かった。「富士山モデル」を参考にすると、自分の「心」を理解し向き合い方を身に付ける「心」や、自分の「体」の状態を理解しその整え方を身に付ける「体」に分類される活動も学校内で検討することが必要である。

参考文献

- ・小澤智子（2020）「全ての生徒が安心して生活できる学校づくりを目指して一生徒の思いに寄り添う教育相談を通した信頼関係づくりー」 静岡県総合教育センター
- ・小林朋子（2019）『しなやかな子どもを育てるレジリエンス・ワークブック』 東山書房
- ・小林正幸、大熊雅士（2009）『不登校にしない先生・登校を支援できる先生』 明治図書
- ・静岡県教育委員会（2013）「人間関係づくりプログラム 高校生版」
- ・文部科学省（2021）「令和元年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査」